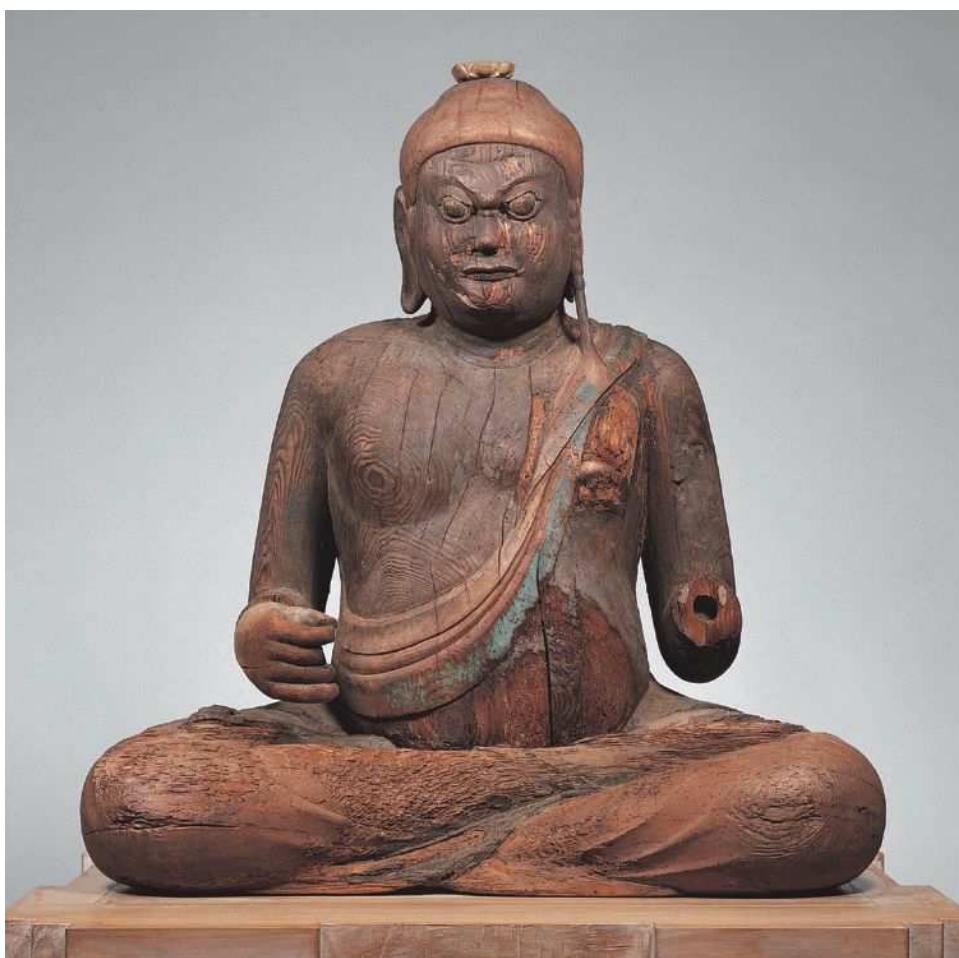


Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第66号

平成20年 7・8・9月



不動明王坐像（東大寺）

特別展

国宝 法隆寺金堂展

6月14日（土）～7月21日（月・祝）
東新館

特別陳列

建築を表現する

—弥生時代から平安時代まで—
6月14日（土）～7月13日（日）
西新館

特別展

西国三十三所

—観音霊場の祈りと美—
8月1日（金）～9月28日（日）
東・西新館

平常展

仏教美術の名品

本館 平常開館
西新館 ～7月13日（日）

中国古代青銅器

本館 平常開館

特別陳列

建築を表現する

— 弥生時代から平安時代まで —

6月14日(土)～7月13日(日)
西新館



陶製仏殿（御墓山窯跡出土）
（伊賀市教育委員会）

古い建物が、つくられた当初の姿のまま現代まで残っていることは稀です。そこで、古建築を復元する際には、古の人々が絵画や器物に遺したイメージが重要な手がかりとなります。本展では、さまざまな目的で、さまざまな材質に表された建築を紹介します。

奈良は古建築の宝庫です。この展示を観覧された後、今に残る奈良の古い建物をご覧になれば、また違った印象を味わえることと思います。



●華嚴五十五所絵巻（東大寺）

特別展

国宝 法隆寺金堂展

6月14日(土)～7月21日(月・祝)
東新館



増長天 広目天 多聞天 持国天
●木造四天王立像

世界遺産に登録された奈良・斑鳩町に所在する法隆寺の金堂は、現存する世界最古の木造建築として知られています。その堂内に安置された諸尊像は、わが国における仏教文化の黎明期である飛鳥時代を代表する遺産であり、またその後の長い歴史のなかで脈々と生き続けてきた日本の仏教文化の精華ともいえるべき宝物です。なかでも須弥壇四隅に安置されて本尊守護の役割をになう木造四天王立像（国宝）が、四体そろって寺外で公開されるのは初めての事です。クスノキ材を用いた木彫で、古代東アジアの様々な要素が凝縮した見事な彫像です。

平常展 仏教美術の名品

【注目の逸品】

薬師如来坐像

やくしにょらいざざう
当館 木造 漆箔
平安時代（9世紀）
国宝



平安時代初期の一木彫像を代表する名作の一つで、国立博物館が所蔵する彫刻の中で唯一の国宝です。

異国的な風貌が強い印象を与え、鋭い衣文の処理には目を見張るものがあります。螺髪と両手先を除いて、頭頂から台座蓮肉部に至るまでカヤの一材から彫成されており、内剣はありません。カヤは、白檀の代用材として当時の木彫像で多用されました。

この薬師如来坐像は京都の若王子社の本地仏であったと伝えられていますが、像の制作年代が同社の創建年代（平安時代後期）を遡るため、伝来に関してはなお謎が残ります。

（稲本泰生）

特別展

西国三十三所

— 観音霊場の祈りと美 —

8月1日(金)～9月28日(日)
東・西新館



千手観音像（観音正寺）



◎不空絹索観音坐像（南円堂式）（東鳴川観音講）



那智参詣曼荼羅（關鷄神社）



◎法華経 普門品第二十五（長谷寺）



◎石山寺縁起絵巻 第二巻（石山寺）



◎鳳凰文磚（南法華寺〈壺阪寺〉）



◎観音菩薩立像（一乗寺）

西国三十三所は、古代より続く日本最古の巡礼の道です。札所と呼ばれる三十三の寺・堂を順に巡る西国巡礼は、奈良時代に長谷寺を創建した徳道上人（とくどうしやうにん）にはじまり、平安時代中期の花山法皇（かざんほうおう）（九六八―一〇〇八）の中興を経て広がったと伝えられています。

それぞれの札所は、宗派も決して同じではなく、地域も広範囲にわたっていますが、いずれも観音菩薩を寺・堂の本尊としていることが共通しています。聖観音、十一面観音、如意輪観音、千手観音、不空絹索観音、准胝観音、馬頭観音——本尊の姿はさまざまですが、いずれも観音であることにはかわりなく、かえつてそこからは姿を変じて人々を救済するという観音菩薩の多様さがうかがえます。このように、西国三十三所巡礼は、宗派や地域を越え、観音菩薩という存在によって結ばれた一筋の信仰の道といえるでしょう。

折しも今年は、花山法皇の崩御より一千年の記念の年に当たります。本展では、これに合わせて西国三十三所の各霊場に伝えられた秘伝や至宝の数々をご紹介します。西国巡礼の信仰と歴史を辿ります。また、霊場に寄せられた美を通じて、先人が観音菩薩に託した思いを感じてみてください。さらに、観音信仰に関わるさまざまな造形を通して、古代以来信仰を集めた観音菩薩という存在についても一層理解を深めていただければ幸いです。

札所の名宝が一堂に会するこの機会に、観音霊場を巡る旅を展示室でもお楽しみ下さい。

瓦経の魅力

永井 洋之（当館研究員）

博物館に陳列される作品は、個々に色彩豊かであったり、形が個性的であるなど、博物館を訪れた人の目を惹きつけてくれると思うが、なかには作品のもつ魅力が伝わりにくいものもある。経塚（経典を土中に埋納した施設）から出土した瓦経などはそのひとつではないかと思う。そこで瓦経の魅力について少し紹介したい。

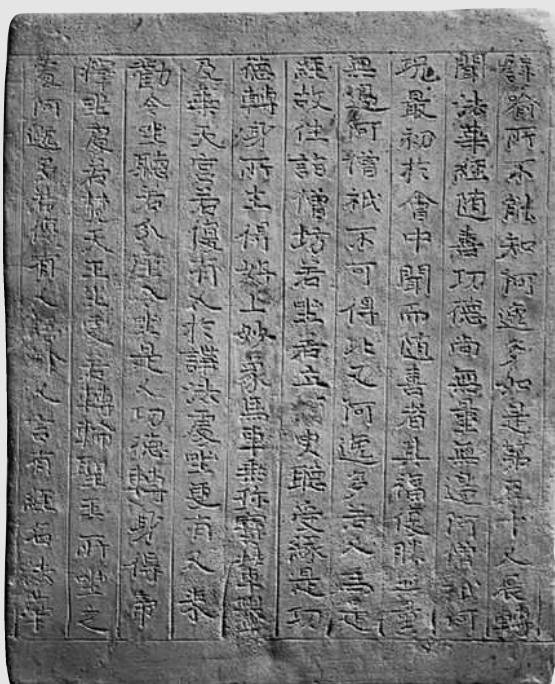
瓦経とは、粘土板にヘラやキリ状に先の尖ったものを使って、表面が乾かないうちに経典を刻んで（書き写して）、焼き上げたも

のをいう。一見、屋根瓦に経文を刻んだように見えることから「瓦経」あるいは「経瓦」と呼ばれているが、実際に瓦として使われたものではない。

瓦経は、仏教の教えを記した、経典を後世へ伝えることを目的とし、古来より信仰されてきた霊山の頂上などに造られた経塚から出土する。経塚は、平安時代の中頃から造られるようになるが、多くの場合、紙に書き写した経典（紙本経）を金属製の経箱や経筒に納め、さらに陶製の外容器などに入れて埋納している。しかし紙本経は土中で腐食することもある。その点、瓦経は、破碎の恐れがあるものの土中で腐食することなく、表面に刻んだ文字が消えてしまうこともないものであったが、紙本経に比べて出土例が少なく、瓦経が盛んに作られたのは十一世紀後半から十二世紀後半を中心とする限られた時期といわれる。これは紙本経に比べて、制作に多大な労力を必要としたことが理由の一つと思われる。また、瓦経は多くの場合破碎された断片として見つかる場合が多く、完全な一枚（完形品）のすがたで残っているものはそう多くはない。

現在、博物館が所蔵する瓦経のなかに、永久二年（一一一四）に制作された飯盛山瓦経の一部と考えられる完形品が二枚ある。瓦経は埋納された経塚によって、大きさや経文の字数・行数に特徴があり、出土地はその特徴から推定できる。飯盛山瓦経は、現在の福岡市西区にある飯盛山山頂より出土した『法華経』ほか複数の経典と願文などを記した瓦板の総称で、他所で所蔵される瓦板のひとつに永久二年の年紀があり、制作年がわかっている。大正十五年の時点で七一枚の完形品があったと報告されているが、『法華経』に関していえば、現在その所在がわかっている完形品は当館のものを含めて十一枚である。

出土地である飯盛山は、次郎丸駅（福岡市地下鉄七隈線）で下車して南西に向かうとすぐに見える標高三八五メートルの小さな山で、ふもとには飯盛神社がある。瓦経は山頂の上宮跡で出土し、その場所には瓦経が出土したことを記した石碑が建て



瓦経（飯盛山経塚出土）（当館蔵）



飯盛山



山頂（中央が石碑）



旧道



ロープが張られた旧道

られている。現在では修験の道と呼ばれる旧道を登ってみると、途中でロープを使って登らなくてはならない場所もあるが、軽装であれば山頂まで一時間足らずで到着する。瓦経を埋納した当時も、山頂まで同じような道を登っていたと思われる。『法華経』の経文を飯盛山瓦経一枚の字詰め（一七字）・行数（表裏各一〇行）で分割すると、二〇七・二〇八枚であったと推定でき、他の経典を含めるとそれ以上の枚数の瓦経が、多くの人の手によって山頂まで大切に運ばれて埋納されたことがわかる。

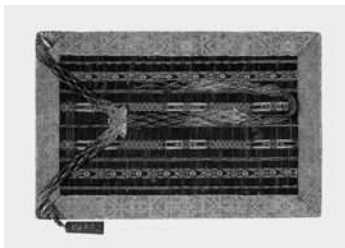
瓦経は経塚からの出土品として陳列されるが、瓦経自体は平安時代の写経でもある。単に写経というばかりでなく、制作や経塚への埋納には想像以上に多くの人の労力が費やされている。そのような目でもう一度見ると、瓦経のもつ魅力をもう少し感じていただけないかと思う。



紙紙金字法華經卷第四(興聖寺)



●阿彌陀聖衆來迎図(心蓮社)



神護寺經帙(細見美術財団)



●天寿国繡帳(中宮寺)



●銅板經(大分県長安寺經塚出土)(長安寺)

特別陳列

建築を表現する

― 弥生時代から平安時代まで ―

7月13日(日)

西新館

【弥生時代】◎絵画土器(唐古・鍵遺跡出土)

(京都大学総合博物館)・絵画土器(唐古・

鍵遺跡出土、清水風遺跡出土)・(田原本町

教育委員会)・絵画土器(清水風遺跡出土)

(橿原考古学研究所)・絵画土器(中曾司遺

跡出土)・(橿原市教育委員会)

【古墳時代】家形埴輪(東大寺山古墳出土)

・複製、原品(東京国立博物館)・家形埴輪(入

見塚古墳出土)・以上、天理大学附属天理参

考館)・家屋文鏡(複製、原品(宮内庁書陵部)

(佐味田宝塚古墳出土)・(橿原考古学研究所

所附属博物館)・家形埴輪(丸塚古墳出土)

(城陽市歴史民俗資料館)・家形土器(和歌

山県六十谷大同寺古墳出土)・家形陶棺(津

山市河辺出土)・以上、東京国立博物館

【飛鳥・奈良時代】玉虫厨子(模造)・セソ

ン現代美術館、原品(法隆寺)・陶製仏殿(御墓

山窯跡出土)・伊賀市教育委員会)・銅板

法華説相図(長谷寺)・百万塔(当館)

【平安時代】◎法華経宝塔曼荼羅卷第二談

山神社)・◎信貴山縁起絵巻(飛倉巻(朝

護孫子寺)・◎華嚴五十五所絵巻(東大寺)

・瓦塔(浜松市三ヶ日町宇志出土)・◎華嚴五

十五所絵巻)・◎一字宝塔法華経卷第五、金剛

頂経瑜伽十八会指帰(中尊寺経)・◎宝塔

形経筒(伝福岡県出土)・以上、当館

特集展示

繡仏と染織の美

7月13日(日) 西新館

◎天寿国繡帳(中宮寺)・刺繡釈迦・阿弥陀

二尊図(当館)・刺繡阿弥陀如来像(個人)

・刺繡釈迦三尊来迎図(真正極楽寺)・刺繡

阿弥陀三尊来迎図(個人)・刺繡阿弥陀三尊

来迎図・刺繡種子阿弥陀三尊図(以上、当館)

・刺繡種子阿弥陀三尊図(禅林寺)・刺繡種

子阿弥陀三尊図(大福田寺)・刺繡種子阿弥

平常展

仏教美術の名品

7月13日(日) 西新館

考古

土偶(山形県杉沢遺跡出土)・人物線刻装

飾付子持壺(愛知県松山市出土)・◎画文

帯神獸鏡(大和天神山古墳出土)・以上、当館

・銅鐸(妙国寺)・◎粟原寺伏鉢(談山神社)

・◎鉦装大刀・玉・銅鏡(東大寺金堂鎮壇具の

うち)・(東大寺)・◎玉類(元興寺塔跡出土)

(元興寺)・素弁連華文軒丸瓦・奈良県横井

魔寺出土)・単弁連華文軒丸瓦・均正唐草文

軒平瓦・奈良県山田村魔寺出土)・単弁連華

文軒丸瓦・奈良県山田寺出土)・複弁連華文

文軒丸瓦・花唐草文軒平瓦(鳥根県出雲国

分寺出土)・複弁連華文軒丸瓦(奈良県東

大寺出土)・◎佐井寺僧道棄墓出土品、◎山

代忌寸真作墓誌、行基舍利瓶残欠、灰釉平

瓶(奈良県壺坂寺奥院出土)・◎青磁鉢・奈

良県正暦寺出土)・正暦寺)・◎青磁碗・鳥

根県萩村古墓出土)・飛鳥文陶製外筒(伝

愛媛県北条市出土)・瓦経(福岡県飯盛山

経塚出土)・以上、当館)・◎銅板経(大分県

長安寺経塚出土)・(長安寺)・銅経筒・松喰鶴

方鏡・銅製六器・独站杵・白磁盒子ほか(山

口県長門一ノ宮経塚出土)・◎銅製経筒・滑

石製外筒(伝福岡県出土)・◎滑石製弥勒如

来像(鉢形嶺経塚出土)・以上、当館

絵画

◎六道絵(衆合地獄)(聖衆来迎寺)・◎釈迦

阿弥陀梵遺来迎図(雲迎寺)・◎九品来迎図

〔下品中生〕(瀧上寺)・◎阿弥陀聖衆来迎図

(心蓮社)・◎阿弥陀如来像(一乗寺)・◎当

麻曼荼羅(西教寺)・◎一遍聖絵(第五卷)(清

浄光寺)・理趣経曼荼羅図像(当館)・両界曼

荼羅(南法華寺)・◎五明王像(一乗寺)・両

頭愛染曼荼羅(当館)・◎文殊菩薩像(当館)

・◎普賢延命像(当館)・◎千手観音像(金峯

山寺)・◎十三天像(地天)(西大寺)

〔表紙写真解説〕

不動明王坐像

奈良 東大寺
木造 彩色 像高七二八

平安時代 十世紀
奈良県指定文化財

も東大寺法華堂に安置されていた、等

身よりやや小さい不動明王の古像である。

頭体の大部分を、両肘までを含めてヒノキの

一材から彫出し、両脚部に横木一材を寄せる

構造になる。この両脚部材は上面中央が

削られ、その上に球体の腹部を組み入れる

という珍しい仕様であり、同類のものには岩

手県黒石寺僧形坐像(一四七七年)がある。

内刳りは体部背面から削り、それは地付き

まで通っている。肉身は青色と見られるが、

彩色はほとんど剥落している。左手は前膊

半ばより先を欠失し、右手の臂より先は後

補(この後補部分は後述の高天仏師の手に

なるか)・絹索(左手)・宝剣(右手)の持物は

欠失。

顔は正面して、両眼を大きく見開き、上

歯で下唇を噛んで左右の口端から牙を出

させる。このような忿怒相は他に京都広隆

寺の不動明王像があるが、類例は少ない。本

像は広隆寺像ほどに忿怒の感情表現が激

しくない。頭頂が隆起するのは不動明王と

しては特異であるが、頭上の沙髻は後補。体

軀は横幅があり、充実した肉取りを表し、

両膝の間を広く取った正面観は力感に溢れ

ている。奥行きが深いがつりとした側面観

や、両足の脛にみられる間隔を広く空けた

書跡

◎大毘婆沙論卷第二十三(五月一日経)(東

大寺)・◎大毘盧遮那成仏神變加持経(吉備

由利願経)(西大寺)・◎法華経(丹生都比売

神社)・紺紙金字法華経(興聖寺)・大方等大

集経菩薩念仏三昧分卷第九、大般若経(快

円一筆経、如意輪法)(以上、当館)・大塔供

養願文(当館)・◎星尾寺縁起(高山寺)・◎

五山衆試文稿(竹林院)

簡潔な衣文表現などにも、平安初期彫刻

の伝統がまた色濃く残っている。しかし、

忿怒の激しい感情を抑えた表現や、脚部

材を腹部に組み込む構造技法などを併せ

考えると、本像の制作は十世紀半ばから

後半にかかると推定される。

奈良時代の仏像が林立する法華堂では、

「当行」と呼ばれる修験道的色彩の強い行

法が平安後期に行われていた。そこでは観

音・不動・地藏などの諸尊に千日間、花を

供え続ける行法が行われ、千日不断花と

も花供け(とも称され、近世末期まで

続けられたという。本像はこのような「当

行」と密接な関わりのある仏像であったこ

とが、旧底板の修理銘によつて知られる。そ

れには応安五年(一三七二)高天仏師の円

賢房が修理を担当したことも記される。

高天仏師は登大路・富士山とならぶ奈良

仏師であり、南北朝から室町時代に活躍

した。

本像は、奈良県指定文化財の修理事業

として平成十五年度から二、九年を要して

当館文化財保存修理所で保存修理が実

施された。施工は財団法人美術院。この修

理では平安時代中期の制作という本来の

史的価値を重視するとともに、南北朝時

代(応安五年)の修理の歴史が消滅しない

ように特に配慮され、後補部材も撤去せ

ずに再使用されている。また朽損箇所は補

修に対しては現状維持修理の考え方が徹

底されており、修理後の初出陳である本像

はその意味でも注目されるであろう。

(鈴木喜博 当館上席研究員)

展示評

天馬のたどつて来た道

曾布川 寛
(京都大学人文科学研究所教授)

「天馬」特別展は時宜を得た展覧会であった。いま中央ユーラシア一帯の東西交渉、特にシルクロードを中心とした東西交流に多くの眼が向けられており、天馬はそこを西から東へと駆け抜けた文化の最も象徴的な存在だからである。ペルシアに端を発して、中央アジア、東トルキスタンの砂漠を経て中国にたどり着いた天馬は、そこから更に海を渡って日本に到着点を見出した。法隆寺に伝わる四騎獅子狩文錦は、長さ二メートル五〇センチ、三列に十五もの連珠文を配した豪盛なもので、獅子めがけてバルティアンシヨットで弓を射る騎士が乗る天馬は、いまもなお金色の華麗な翼を輝かせ顕在であった。これこそ古来、正倉院伝来の漆胡瓶などと並んで、私たちにペルシアへとローンを誘ったものであった。

しかし、近年、このペルシアのローンに少々かげりが生



じ始めたようである。代わって、俄然脚光を浴び始めたのが中央アジアのソグドである。当時、法隆寺の獅子狩文錦を織り出した唐代の中国は、西方ブームに沸き立っており、都の長安で飛びかったのが「胡」という言葉であった。胡人、胡姬、胡服、胡楽、胡旋舞など枚挙にいとまがないほどである。この「胡」について、以前は漠然とペルシアを指したものと考えられ、正倉院の漆胡瓶の場合でもそうであったが、実は唐代の人々が「胡」と呼んだ対象は、主にソグド人であり、その文物であった。

ソグド人は、中央アジア・サマルカンド一帯のソグデイアナに住んだイラン系の民族である。商売が上手なソグド商人は外国に出かけては植民聚落を築き、独自のネットワークをめぐらして国際的に活動した。シルクロード交易の主役として、もちろん中国にもやって来、近年、西安や太原などでそのソグド人の墳墓が続々と発見されている。今回展示された石棺床飾板も、西安・安伽墓の石棺床屏風などと同じく、中国に移住したソグド人の墓から出たものであろう。ササン朝ペルシアで信仰されたゾラスター教の拜火壇が中央に浮彫りされているが、ペルシアのコインに描かれた拜火壇と形が異なっている。このように、従来ペルシア製と思われたものが実はソグド製であったり、ペルシアに起源を有するものが、ソグドを経由することで大幅に変形したものが実に多いのである。

ペルシアの天馬の最も代表的な作品は、エジプト・ティンティエ出土の天馬文錦(リヨン織物博物館蔵 図)である。頭頂に冠、脚にリボンをつけた有翼の天馬が一頭だけ連珠文の中に描かれている。この神聖無比の天馬に、いつ、どこで、法隆寺やトルファン出土の連珠文錦のように人間が騎乗するようになったのか。これもソグドに始まったものではないか。そんなことを思いめぐらしていると、今回初めてめぐり会った中央アジア出土という淡茶地に有翼馬文錦 平山郁夫シルクロード美術館蔵)は、多くの示唆を与えてくれ実に有益であった。

●公開講座●

特別展「国宝 法隆寺金堂展」

- 7月12日(土) 「法隆寺金堂四天王像の諸問題」
岩田茂樹(当館学芸部長補佐)
- 7月19日(土) 「建築史からみる法隆寺金堂」
鈴木嘉吉(元奈良国立文化財研究所長)

特別展「西国三十三所—観音信仰の祈りと美—」

- 8月2日(土) 「西国三十三所の歴史」
速水 侑(東海大学名誉教授)
- 8月30日(土) 「西国三十三所の観音霊験像とその広がり」
鈴木喜博(当館上席研究員)
- 9月13日(土) 「“胎内くぐり”としての西国巡礼」
松尾心空(29番札所 松尾寺名誉住職)
- 9月27日(土) 「観音の浄土・補陀落山—その信仰と造形」
清水 健(当館研究員)

※各回とも、午後1時30分～3時、当館講堂にて、定員200名(午後1時より講堂入口で整理券を配布し、開場します)。聴講無料。

●サンデー・トーク●

- 7月20日(日) 「法隆寺金堂台座の絵を読み解く」
谷口耕生(当館研究員)
- 8月17日(日) 「円教寺開山堂の性空上人坐像について」
岩田茂樹(当館学芸部長補佐)
- 9月21日(日) 「西国三十三所を巡礼した人々」
野尻 忠(当館研究員)

※各回とも、午後2時～3時30分、当館講堂にて。定員200名(先着順、午後1時30分より開場)。聴講無料。

◆奈良国立博物館賛助会

このたび、次の方々にご入会いただきました。

【一般会員(個人)】根本正一 様、根本まさ子 様

【一般会員(団体)】奈良信用金庫 様

【特別支援会員】ノブレスグループ 様、株式会社 鶴屋吉信 様

●第37回 夏季講座「西国三十三所 観音巡礼」●

主催 奈良国立博物館／奈良女子大学21世紀COEプログラム
8月19日(火)

1. 「観音菩薩というはとけの登場」 頼富本宏 (種智院大学長)
2. 「観音信仰の歴史」(仮題) 前田孝道 (2番札所 紀三井寺貫首)
3. 「観音菩薩の説話」 横田隆志 (大阪大谷大学専任講師)

8月20日(水)

1. 「巡礼の歴史と習俗」 白木利幸 (巡礼研究家)
2. 「参詣曼荼羅の世界」 西山 克 (関西学院大学教授)
3. 「西国三十三所と秘仏」 藤澤隆子 (前東海学院大学教授)
4. 「変化観音の展開」 宮治 昭 (静岡県立美術館長)

8月21日(木)

1. 「長谷寺の創建と銅板法華説相図」 稲本泰生 (当館企画室長)
2. 展示解説「西国三十三所の歴史と美術」 清水 健 (当館研究員)

※午後は奈良国立博物館にて、特別展「西国三十三所」の見学

会場：奈良女子大学講堂(近鉄奈良駅から徒歩15分)

会費：3,000円 ※テキスト代を含みます。受け付け終了後に振り込んでいただけます。

定員：400名 ※応募多数の場合は奈良国立博物館友の会メンバーを優先し、なお多数の場合は抽選で決定します。

応募方法：「往復はがき」で申込み下さい。

※「夏季講座参加希望」と書き、

[氏名・住所・郵便番号・電話番号・性別・年齢]を明記して下さい。

奈良国立博物館友の会のメンバーの方は、友の会カード番号もお書きください。

※返信用はがきには宛名を記入してください。

受け付けの可否を7月31日(木)までにご連絡します。

※はがき1枚につき申込者1名としてください。

※(申し込み先)

〒630-8213 奈良市登大路町50 奈良国立博物館 教室

応募締め切り：7月25日(金)必着。

問い合わせ先：教室 電話 0742-22-4464 FAX 0742-22-7221

◆キャンパスメンバーズ

このたび、次の大学等に新たにご入会いただきました。

就実大学人文科学部、実践女子大学文学部、

京都伝統工芸大学校、京都教育大学、天理大学(入会順)

えん ま おう ざ ぞう 閻魔王坐像

重要文化財
奈良・東大寺
木造彩色
鎌倉時代(13世紀)



閻魔はインドの冥界の王であるヤマが仏教に取り込まれたものであるが、その信仰が大きな展開をみせたのは、唐時代中国においてである。ここに至って死者が冥界の十王庁を巡歴して生前の行状を審判され、次の生を定められるという考えが確立され、閻魔は死後世界全体を主宰する一方、十王の一人として死後五七日(三十五日)の裁判にあたる恐るべき存在と位置づけられた。

中国式の裁判官の姿をとるこの閻魔王像も、基本的にこの流れにのる遺品であるといえる。頭部は肩にめり込むかのように、口を大きく開いて怒号する表情は、威圧的な迫力に満ちている。鎌倉彫刻特有の写実主義が顕著にうかがえる一方で、閻魔の特徴を引き出すべく、各部の造形において思い切った誇張と省略の表現が行われている点が目を引く。

本像は嘉禎3年(1237)に康清によって制作された東大寺念仏堂本尊の地藏菩薩像の脇侍として、やはり十王の一人である泰山府君像と一対で造立されたと考えられている。六道をめぐる衆生の救済者である地藏に対する信仰は、行いの善悪を見抜き、これを裁く者に対する畏怖の感情と、表裏一体をなしていたのである。

稲本泰生(当館企画室長)
本館第3室にて8月19日から展示

平常展の みどころ

てい 鼎

奈良国立博物館(坂本コレクション)
青銅製 高25.3cm、口径19.3cm
中国・西周中期(紀元前10~9世紀)



この奇妙な人形の記号はいったい何と読むでしょう? 今からおおよそ三千年前の中国では、こうした文字が青銅器に刻まれていました。片手を挙げた無邪気な姿は、漢字の「子」の原形です。両手で抱きつくような姿は、さらに小さな子供のイメージ、すなわち漢字の「孫」の原形。正解は「子孫」です。このように、私たちが使っている漢字の中には、物事の形を起源とするものが少なくありません。漢字研究の大家、白川静氏は、「漢字は原始より現代に至るまでを一貫して生きつづけてきた、唯一の文字体系である」といっています(白川静 岩波新書『漢字』)。

エジプトのヒエログリフやメソポタミアの楔形文字など、古代文明の文字はことごとく死滅しています。その意味で、私たちは東洋の偉大な遺産を受け継いでいるといえるでしょう。古代の中国人は青銅製の容器を作り、神や祖先のお祭りに使いました。銘文の内容は「王から恩賜を頂いた」、「これを記念して先祖の霊を祭る器を作った」、「子孫の代まで伝えよ」という意味です。名誉を重んじ、先祖や親を敬う。後の儒教の精神へとつながる思想がここに認められます。

吉澤 悟(当館教育室長)
本館第15室にて展示中



「これ八月初吉(第一週)、辰は乙卯に在り。公、旅□と旅(軍旗と旗竿?)を賜ふ。用て文父日乙(乙という名の宗廟に祀られる文氏の先祖)の賁降彝(青銅の容器)を作り、子孫に析す(分かち)。」

唯八月初吉
辰才在乙卯公賜
旅□旅用乍作
文父日乙賁
降彝析子孫

開館予定(7月~9月)

■開館時間

午前9時30分~午後5時(毎週金曜日と
8月9・10・13・14日は午後7時まで)
※いずれも入館は閉館の30分前まで

■休館日

月曜日(祝日の場合はその翌日)
※8月11日は開館します。

観覧料金

特別展「国宝 法隆寺金堂展」

特別展「西国三十三所一観音霊場の祈りと美一」

	一般	高校・大学生	小・中学生
個人	1,200円	800円	500円
前売	1,000円	600円	300円
団体	900円	500円	200円

平常展(特集展示を含む)・特別陳列

	一般	高校・大学生	中学生以下
個人	500円	250円	無料
団体	400円	200円	

*団体は責任者が引率する20名以上。



〔交通案内〕近鉄奈良駅下車徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅から奈良交通「市内循環」バス「氷室神社・国立博物館」下車

※当館には駐車スペースがございませんので、最寄りの県営駐車場等(有料)をご利用ください。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum

〒630-8213 奈良市登大路町50(奈良公園内) TEL. 0742-22-7771 FAX. 0742-22-7221 テレホン・サービス 0742-22-3331 ホームページ(URL) <http://www.narahaku.go.jp/>

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒を同封して、当館の情報サービス室にお申し込みください。
※返信用封筒には宛名を明記し、長形3号の場合は90円切手を、角形2号の場合は120円切手を貼付してください。